SOUND OF HEART

花衣香音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＯＵＮＤ　ＯＦ　ＨＥＡＲＴ

【Ｎコード】
Ｎ１１６４Ｚ

【作者名】
花衣香音

【あらすじ】
秋（しゅう）は新米の英語教師として高校に赴任してきた。他の教師から誘われるが、秋には恋人がいるという。彼女の恋人とはいったい誰なのか。秋の気持ちはどうなるのか。新米英語教師、秋のお話です。

新学期1

秋(しゅう)はこの春から高校の正教員として採用された。
担当科目は英語。

中学、高校とイギリスの学校へ行っていたので、英語は日本語と同じくらい使いこなせる。
そのためなのか、新卒にもかかわらず、採用されることができたのかもしれない。

今は卒業してすぐ正教員に採用されるには採用試験でかなり頑張らないといけないと聞いていた。
秋は採用されてとても嬉しかった。
教師になるのはずっと夢だったのだ。
中学時代、勉強の楽しさを教えてもらってから、自分もぜひ教師になりたいと思っていた。

赴任する学校には前に挨拶に行っているし、準備で何度か出勤もした。
それでも、新学期、教師として学校へ行くのは緊張する。

少し早めに学校に到着して他の先生方に挨拶をする。
自分用に与えられた机が、すでにこれから教師としての第1日目が待っていることを告げているようだった。

今日は生徒たちの前でも、新しく赴任した先生として紹介される。

あまり人前で上がらない秋だが、緊張はしていた。
これからはじまる教師としての生活に期待と不安が混じっている。

朝、職員の朝礼があり、始業式の準備、注意点など指示があった後体育館へ向かった。

今年、秋の赴任した学校には新卒の秋と、新採の数学の教師がいた。この辺りの学校では今年から、数学と英語に力を入れるらしくそれで採用枠があったらしい。
残りの先生方は何年目かのベテランだ。
その他に移動になった先生方もいたようで、転勤で学校を離れた先生の分、新しい先生方が代わりにやってきたが、みんな別の学校から転勤になってきた先生方なので、教師として新米なのは英語担当の秋と数学の田上という新採の教師だけだ。

移動になった教師と、新しく採用になった教師の紹介が始まった。

「…では次に、英語担当の坂井秋先生です。1年生の英語を担当し、同じく1年生の副担任になります。」

秋が生徒たちに向かって軽く頭を下げる。

「続いて、田上直輝先生、2年生の数学を担当してもらいます。同じく2年生の副担任になります。」

田上も秋と同じように、生徒たちに向かって、頭を下げる。

紹介が終わると壇上から降りてそのまま始業式に参列していると、

生徒たちから自分たちのことが言われているのが聞こえてきた。

「…ねぇ、ねぇ…新しい田上先生、かっこいいね。」

「うん、私もそう思った…」

「いいなぁ、2年生、田上先生に勉強教えてもらえて…。」

「2年じゃなくても、質問しに行ってもいいのかな…」

別の生徒たちからは秋のことを話している声が聞こえてきた。

「…なぁ、あの坂井って結構いけてんジャン。」

「…俺も、結構好みかな。」

「まだ若いんだろ。」

「なんか新卒って話だぞ。」

「…ってことは22ってことか。」

「先生、わかりませぇーん、とか言って、顔覚えてもらうかな。」

「でもさぁ、転勤で来た湊先生の方がカッコイイよね。」

「うん、私も田上先生より、湊先生の方が絶対いい…」

「すごい、大人って感じだしさ…」

「うん…眼鏡かけててクールって感じだよね。」

始業式の間中、生徒たちは新しく来た先生たちの話で持ちきりだった。

新学期2

職員室に戻ると、クラスを受け持っている教師たちはそれぞれ自分のクラスへ向かった。

副担任である秋は自分のクラスがないため、そのまま職員室で明日からの授業の準備などをしていた。

「坂井先生、どうですか、生徒たちが学校にいるときといないときではだいぶ違うでしょう。」

校長が秋に話しかけてきた。

「はい、校長先生。」

今日は新年度の初日なので学活が中心で、実際の授業は明日からです。頑張ってくださいね。」

「はい。」

「坂井先生は生徒たちと一番年齢が近いので、話も合うんじゃないですか?」

「…そうだといいんですけど…」

すぐ近くにいた田上にも校長は声をかけた。

「あぁ、田上先生。先生も明日からが授業ですね。」

「はい。僕は明日、1時間目からです。」

「先生も、坂井先生と同じようにまだまだお若い。生徒たちはやはり若い先生に自分の兄や姉のようなつもりで、距離が近いと思う場合が多いです。ぜひ、若い先生方なりに生徒たちの力になって欲しいですね。」
「はい、僕もそう出来たらいいと思っています。」
「それは頼もしい。期待していますよ。」
「ありがとうございます。」

そう話すと、校長は自分の仕事に戻っていった。

「坂井先生…、新卒だとお聞きしてたんですけどやはりお若いんですね。」
「…そうですか…？」
「そうですよ。まだ２０代初めの頃と、そうでないのでは、違いますよね。」
「…でも、田上先生だって、お若いんじゃないですか？」
「僕ですか？もう２６ですよ。普通に勤めてたんですけどやっぱり教師になりたくてね。
３年ぶりにもう一度教員採用試験を受験したんですよ。」
「…そうだったんですね。」
「坂井先生は１度で合格したんですね。すごいですね。」
「…そんなことないですよ。」
「イギリスに行ってた、と聞いてますが…長かったんですか？」
「…６年くらいです。」
「その間は地元の学校へ？」
「そうですね。」
「それじゃあ英語の方が得意なんじゃないですか？」
「…どうでしょう…自分ではあまりきちんと意識したことはないんですけど…」

「それでも不自由なく話せるんですよね。うらやましいな。ぜひ僕にも英語を教えて欲しいですね。」

田上はどうやら秋の様子を伺っているようだ。
社交辞令というよりは、秋がどういう人間か試しているのだろうか。
学校と言う特殊な環境は人間関係がいろいろと大変だと聞いていた。
そういう意味でもいろいろと探りを入れているのかもしれない、と秋は思った。

それに、田上は秋に興味を持っているような雰囲気も伺えた。
自分の気のせいならいいのだが、ここは適当にかわしておいた方がいいだろう、と秋は思った。

「大人の方に教えるのは難しいですから、専門の学校へ行かれるといいですよ。」
「…そうですか。でも、なかなかそういうところへ行く時間がないんですよね。」
「…それは、こういう仕事ですから、慣れるまでは仕方がないですよね。」
「確かに…。僕も家に戻ってから授業のことが頭から離れないんですよ。初めての授業は…ってね。」
「それは…私も同じです。明日からですよね。」＞ＢＲ＜
「そうですね、まぁ、お互いに頑張りましょう。」

そんな話をしていると、３年生の副担任である山本が職員室に入ってきた。

「ああ、若い先生方ですね。生徒たちと同じ教師の１年生ですね。」

「はい、よろしくお願いします。」
「さっきプリントを渡しに教室をちょっと見てきたんですけど、生徒たちはもう先生方の話をしていましたよ。」
「えっ…そうなんですか…」
「そうですよ。田上先生の名前は女子生徒たちにはしっかりと刻まれたみたいですね。」
「…それは…光栄ですね…。」
「それから、坂井先生もですよ。」
「私もですか…」
「男子生徒たちが先生に質問しに行くってはりきってましたから…」
「…質問…ですか…」

いったいどんな質問をされるのだろう…秋は、そんなことを考えた。

「まぁ、これから徐々に慣れていくと思いますから、頑張ってくださいね。」
「…はい…」
「それから今週の金曜の夜は、明けて置いてください。
今年赴任された先生方の歓迎会を開くので。
場所はまた金曜日になったらお知らせすると思いますが、ここの先生方はほぼ全員毎年出席されるので、よろしくお願いします。」
「…はい、あけておきます。」

それだけ話すと、山本は自分の席の方へ戻っていった。

新学期3

初日の午前中はほとんど準備で終わった。
学校自体もこの日は午前中しかないので、教師たちも職員室に戻って昼食を取り始めた。

秋はお弁当を持ってきたのだが、どうしたものかと考えていると1年を担当している女性の教師、有吉が一緒に食べませんか、と声を掛けてきてくれた。

「坂井先生、今日は初日で緊張したんじゃない？」
「はい。やっぱり生徒たちが目の前にいると違いますね。」
「でも、明日から授業があるんでしょ。」
「はい、明日は1時間目から午前中はずっとあります。」
「そう、頑張ってね。」

有吉と食事を取っていると、他の女性教師たちも秋達に混ざってきた。
女性より男性教師のほうが人数が多いので、こういう午前中だけの授業などのときは比較的みんな集まって、食事を取ることが多いようだ。

お弁当を食べ終え、秋は他の教師たちと話していた。

「坂井先生…新卒でしょ。若いわよね～。」
「生徒たちとあんまり変わらないんでしょ。」
「先生…22歳？」

「ハイ…」
「いいなぁ～」
「私もその頃に戻りたい…」
「いいわよねぇ…可愛いし、お肌ぴちぴちだし…」
「エ…あの…」

秋は苦笑しながら、話を聞いていた。

こういう現場だと、どうしても新しく赴任してきた教師が話題のターゲットにされてしまうのだろう。

「あんまり坂井先生をいじめるのはかわいそうよ。」
「だって、ねぇ。やっぱり若い人にはいろいろ聞きたいし…」
「先生方、これ、結構つらいんですよ…」
「あら、愛美先生。」
「だって、去年まで私がいつも先生方のターゲットだったから…坂井先生の今の気持ち、すご～くわかります。」
「そう、そう。愛美ちゃんも若かったわよね。えっと、２６だった？」
「そうよ。確か家の息子と同じ。」
「馬場先生…」

職場の先生方からいろいろな質問を浴びせられたが、それは同じ職場で働く彼女たちなりの心遣いなのだ、と秋は思った。
こうしてざっくばらんにいろいろと話しているうちに、午前中にあった硬い緊張が取れ、秋自身すごくリラックスして話が出来るようになった。

秋にはじめに声を掛けてくれた有吉先生は２９歳、愛美ちゃんと呼

ばれていた大谷先生は２６歳、この２人が秋と同じ２０歳代で、他の先生方はもっとずっと上なのか、秘密、といって教えてもらえなかった。

でも彼女たちはいつも生徒たちと接しているせいか、一緒に話していると楽しいし話題が若い。
まだ他の男性教師たちと話をしたわけで無いが、こうしてほっとできる先生方がいる職場で良かった、と思った。

明日からいよいよ授業が始まる、気合入れないとね…

みんなお弁当を片付け始め、それぞれ明日の準備を始めた。
秋もお弁当箱を片付け、明日の授業の準備をするために自分の机に戻った。

新学期４

翌日から授業が始まると週末まではあっという間だった。

毎日授業の準備と、生徒たちの様子を見ながらまた次の準備をする。

まだ慣れていない１週目はいろいろな意味で大変だった。

時間があっという間にたってしまい、授業が終わった後いつも学校に遅くまで残っていて、気づくともうこんな時間、という状態だった。

でもそれは１週目の授業ではあっても秋には楽しいことだった。

ずっとやりたいと思っていた仕事だ。

まだ新米だが、毎日が充実していた。

「坂井先生、そろそろ行かないと他の先生方に怒られますよ…」

「田上先生…？え…もうこんな時間だったんですね。」

「やっぱり…気づいてなかったんですね…他の先生方はほとんど出発されたようですね。」

今職員室に残っているのは、秋と田上、それに後２，３人の先生方だけだった。

「早く行かないと、怒られちゃいますね。」

「僕もちょうど出るところですからご一緒しましょう。」

目的地が一緒なのに別々に行くのもどうかと思い、秋は田上と一緒に歓迎会の行われる店に向かった。

「坂井先生、どうですか授業は？」
「そうですね…ようやく少し慣れてきたって感じです。田上先生は？」
「僕ですか？…まぁ、それなりにですね。」

まだお互いに新任教師だ。
2人ともまだ新米、ということに変わりはない。
教科が違ってはいても、指導に関しては経験がないということで、同じようなところで共感するところも多いようだ。

「坂井先生、男子生徒から人気ありますよ。」
「あ…それはきっと年が一番近いからですよ。田上先生の方こそ、私、女生徒からたくさん先生の事聞かれて、返答に困っちゃいました。」
「…どうして返事に困ったんですか？」
「え…どうしてって…先生の誕生日や趣味なんかを教えてって言われても…何にも知りませんからね。」

秋はクスクスと笑いながら答えている。

田上は秋の笑顔を見ながらいろいろなことを話しかけてきた。
新しく受け持った授業のことや生徒たちとのことなどを話していたら、あっという間に目的地の店に着いた。
すでに他の先生方のほとんどは到着して、後は2，3人ほどの先生が来るのを待っている。
秋たちが店についたすぐ後に、残りの先生たちも到着し歓迎会が始まった。

1次会は和やかな雰囲気ですすめられ、顔を知っている程度だった先生方とも話をすることが出来、結局秋はみんなから坂井先生ではなく秋先生と呼ばれることになってしまった。

その1次会も終わり、2次会へと流れていった。
何人かの先生方は帰宅をしたが、ほとんどの先生は次の2次会へも参加するようだ。

2次会はカラオケだ。
秋は湊の横に座ることになった。

「秋先生、だいぶ生徒たちから評判がいいみたいだね。」
「え…あの、湊先生、どんな評判ですか？」
「秋先生の授業はすごく良くわかるって、1年生の生徒が言っていたよ。」
「あ、ありがとうございます。生徒たちにそう言ってもらえるのが一番ほっとします。」
「まぁ、俺も最初はそうだったからね。秋先生の気持ち、すごく良くわかるよ。」
「えぇ…湊先生も…始めは緊張なさってたんですか？」
「…そりゃそうだろ。」
「でも…なんだか…」
「なんだか…？」
「いえ…湊先生なら、始めからびしっと授業をしてそうなので…」
「どうして？」
「なんか、そんなイメージが…」
「俺ってどんなイメージ？」
「どんなって…そうですね…手抜きがないというか…完璧というか…隙がないというか…」

「すごい言われようだな。」

そういいながら、湊は笑っている。
湊の噂は他の女の先生から聞いた。
授業の質がとても高く、私立の学校からも引抜がひっきりなしに来るらしいのだが、公立の方がいろいろな生徒たちに会えるから、と言って断り続けているらしい。
生徒たちからもたった1週間の間に、信頼できる先生としてすでに一目置かれているらしいのだ。
それに、眼鏡をかけていても顔がいいということは隠しようがないし、表情が妙に色っぽい。
きびきびとした口調で、しっかりと仕事をこなし、すらっと背が高くサッカー部の顧問もする事になった湊は、女子生徒はもちろん、他の女性教師の間でも噂になっている。
秋自身、何度も他の女性教師から湊の話をされている。

「湊先生、秋先生、2人で話してないで何か歌いなさいよ！先生たちの歓迎会なんだから。」

馬場先生が2人に曲のリストが載っている厚い本を手渡す。

「嫌…俺はあんまり歌は…」
「何言ってるの！若いんだから恥ずかしがったってしょうがないでしょ。教頭先生もさっきから歌ってらっしゃるんだから。ほら、何か選びなさい。」

湊は苦笑いをしながら本を受け取る。

「秋先生、あなたもよ。」
「私も…ですか？」

「当たり前でしょ。」
「…私…あんまり歌、知らないんですよね…」
「何でもいいじゃない、好きなの歌えばいいのよ。どうせみんな人の歌なんか聞いてないんだから。」

確かにそうだ。
みんな、始まったときと終わったときは拍手をして盛り上げているが、その間は近くの先生方とおしゃべりをしている。

「えぇ…それじゃ、もし歌える曲があったらでいいですか？」
「それでいいわよ。何？何の曲？」
「あの…英語になっちゃうんですけど…それにあるかどうか…」
「無くても何か歌うのよ、わかった？」
「…とりあえず…探してみます。」

秋は渡された本を持って、一つため息をついた。

新学期5

湊はさっさと曲を入れさせられ、歌い始めた。
話し声もなかなかいいと思うが、歌もかなり上手い。
ちらりと周りを見回すと、女性教師がみんな湊の方を見ている。
特に愛美先生はもう目が釘付け状態だ。

なるほど、愛美先生は湊先生のことが…
秋はそんなことを考えながら周りの人間を観察していた。

ゆっくりとあたりを見渡している途中で、自分のほうへ視線が向けられているのに気づいた。

誰か見てる…？
そちらへ目を向けると、田上がじっとこちらを見ていた。

田上先生？
秋と目が合うと、田上はにこりと微笑み、秋の方へ手を振ってきた。
秋もとりあえず、軽く微笑み返したところで湊の歌が終わり、拍手が起った。

「秋先生、どうだった？」
「は？」
「俺の歌。」
「あぁ、とてもお上手ですね。」
「そう？」
「えぇ。なんか、皆さん、湊先生の方に視線が集っていましたよ。」
「秋先生は？」

「私？」
「せっかく隣に座ったのに、俺の歌ってる姿、見てくれなかったのか。」
「え…あの…あっ…隣ですから…じっと見てたら変ですよ。」
「…そうだな…」

湊は、秋の方をじっと見ている。
秋は、ちょっとお手洗いへ…と言って席を立った。

湊と田上…
学校が始まってから1週間、2人はさりげなくだが秋との距離を縮めようとしているのは気づいていた。
だが秋に全くその気が無いのだから、これからどうにかしてかわしていかないといけない。
大学のときもそうだったが、友達との集りだと言われ、そのつもりで行ったら合コンで、秋のことを気に入った男から逃れるのが大変だったという経験も1度や2度ではない。

こっちにその気が無いのが、どうして分からないのかな…
秋は、一つため息をついた。

そのとき、愛美が化粧室に入ってきた。

「愛美先生」
「秋先生、さっき湊先生と何を話してたんですか？なんか楽しそうでいいなぁって思って。」

愛美がさりげない感じを装って秋にきいて来た。

「何も話してたわけじゃないんですよ。皆さん、湊先生の方を見てましたよって言ってただけなんです。」
「そうなんだ。」
愛美が少しほっとしたような顔をしている。
でもまた何かふと思い出したように表情を曇らせて、秋に話かけた。
「でも…湊先生、秋先生のことずっと見てますよね。さっきも見てたし…」
「え…」
「いいなぁ…」
「愛美先生…」
「私も湊先生ともっと話したい…」
少しお酒が入って酔いがまわっているのかもしれない。
愛美が少し甘えたような、拗ねたような口調で話している。
他の先生から、愛美ちゃん、とちゃん付けで呼ばれるのは、こういう少し幼い雰囲気があるからなのかもしれない。
「あ、愛美先生、私、馬場先生たちに少し教えていただきたいことがあるので、席を替わっていただいてもいいですか？」
「え…いいの…？でも…湊先生、秋先生のこと気に入っているみたいだし…」
「あ…それは…分かりませんけど、でも私は愛美先生が思っているような感情は湊先生には無いので…」
「え…やだ…秋先生にも分かっちゃうの？」
「…えぇ…」
「もう…やだな…恥ずかしい…」
「あの、それに…、私には別に決まった人がいますから…」
「…え…それって…」

「もちろん職場の人ではないです。同級生ですから…」
「え…そうなの？秋先生って彼氏いたの？」
「彼氏というか…なんというか…でもまぁ…相手はいますから…」
「そっか…そうなんだ…じゃぁ、秋先生はもう売約済みってことなんだ♪」
「愛美先生…確かにそうなりますけど…」
「ほんとー、良かった。」

心底ほっとしている様子を見ると、もう苦笑いするしかない。
子供っぽいというか、素直と言うか…

とりあえず、これで湊の視線はかわせそうだ。

化粧室を出て、カラオケの部屋へ戻る。
馬場先生たち女性の間に秋は腰を下ろした。

「あら、秋先生、湊先生の横に戻らなくてもいいの？」
「あ、いいんです。愛美先生に代わってもらいました。」
「えぇ～いいのぉ～？湊先生、なんかこっちにらんでるけど…」
「いぇ…私はこっちの方がいいです。」
「どうして～？湊先生結構いい感じじゃない？秋先生のこと気にしてるみたいだし。」
「いえ、でも私は、本当にいいんです…。」
「でも、田上先生も秋先生のこと狙ってるっぽいよね…」
「さっきも湊先生の横で座って話してるときに、じっと見てたわよね。」
「うん、うん。私も気づいた。」
「秋先生、田上先生の方がいいの？」
「そっかー、秋先生、田上先生だったんだ。」

「え、違いますよ。」
「田上先生の方が、年が近いものね。」
「湊先生っていくつだっけ？」
「確か、今年３０じゃなかったっけ？」
「そうそうよ！このあいだ、ぼくも今年は三十路ですって言ってたもの。」
「でも田上先生か…。秋先生から見たら湊先生は大人の男って感じだけど、田上先生はもうちょっと若い感じなのかしら？」
「いえ、本当に、私どちらの先生のこともそんな風に思っていませんから。」
「あら、どうして？もったいない。この職場、なかなか出会いって無いのよ！いい人見つけたら、さっさとキープしておかないと。」
「いえ、本当にいいんです。」
「…秋先生、恋人いるんだ…」
「…えっ、そうなの？」
「そっか、秋先生、彼氏いるんだ。年は？どこで知り合ったの？」
「え…」
「カッコイイの、秋先生の彼氏？」
「あの…」
「背は？どんな雰囲気？」
「先生方…」

秋が困っているとき、ちょうど秋の入れた曲がかかり始めた。

「あっ、それ、私です。」

とりあえず、質問に答えることは後にして、秋は歌い始めた。

新学期6

秋はイントロが流れ出すと、その音楽とともにゆっくりと英語の歌を歌い上げた。
ゆっくりとしたバラードの曲で、秋のとても好きな曲だ。

周りの先生方は、秋の歌声に話を一瞬止めると、みんなで聞き入っていた。

「うわぁ～、秋先生、すごい上手！」
「その曲って、何、何？」
「あぁ、この曲は”Ｓｏｕｎｄ　ｏｆ　Ｈｅａｒｔ”って言うんです。」
「サウンド…？」
「はい。」
「それって、イギリスのグループ、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭの曲でしょ。」
「田上先生知ってるんですか？」
「そりゃそうですよ、馬場先生。今、本国イギリスはもちろんですけど、アメリカでもすごい人気で、
全米、全英のチャートで出す曲がみんなヒットチャート1位を取ってるんですから。」
「私は全然知らなかった…」
「そうだったんだな。俺の息子も聞いてるんだよな…」
「吉沢先生の息子さんもですか？」
「あぁ。」
「でも、この曲はまだ、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭがデビューした頃の曲ですよね、秋先生。」
「えぇ…田上先生、良くご存知ですね。」

「そりゃ、もう！全米でデビューした頃からのファンですからね。初めて彼らの歌を聞いたときにはもう衝撃でしたね。もうそれから全米デビュー前のイギリスでのアルバムとか聞きまくりましたよ！秋先生も、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭのファンですね、この曲をこんなに歌うくらいだから。」
「ファン…そうですね…」
「ボーカルのジェイはすごいですよ！ねぇ、秋先生。」
「…そう…ですね…」
「ふぅーん…でもいい曲ですね。私も今度聞いてみようかな…」
「いいですよ、有吉先生。このグループはお勧めですね。」
「そうなの？それじゃ今度ＣＤ探してみようかな…」
「それなら僕のＣＤをお貸ししますよ。絶対お勧めですから。」

２次会を終え、秋は家に戻った。
久しぶりに遅くまで外で過ごしていたので少し疲れてしまった。
今日はジェイの歌を歌った…
やっぱり彼の歌はすごい…

Ｕ－ＳＴＲＥＡＭというグループは４年前にデビューしたグループだ。
曲はほとんどをボーカルのジェイが作詞、作曲をしている。
デビューするとイギリスでじわりじわりと人気が出てきて、一昨々年、アメリカでデビューするとたちまち人気に火がつき、全世界でのアルバム売り上げ数はかなりな数だ。

「ジェイ…本当にすごいよね…」

秋は今日歌った歌を思い出しながら、彼らの曲を思い浮かべる。
ベットに入りながら、自然と口から彼の歌が流れ出てくる。

秋の母はイギリスにいる。
中学に上がる前に秋の父は事故で亡くなってしまい、母は秋を連れてイギリスで暮らすようになったのだ。
もちろん、秋の父も母も日本人だ。
だが、仕事の関係で結婚前はヨーロッパにたびたび訪れていた秋の母は、イギリスで仕事をしていくことに決め、秋も中学、高校とイギリスで過ごした。

秋は教師になりたくて大学は日本に戻り、教職を取って今高校で英語の教師をしている。
だが母はイギリスにいるので、年に1度はイギリスに戻っているのだ。

また来週から生徒たちの授業が始まる。
自分も教師として、早く一人前になれるように頑張らないと…

秋はU－STREAMの曲をBGMにしながら、ゆっくりと眠りについた。

新学期7

それからの数週間は授業のことで毎日追われるように過ぎていった。
６月に体育祭があるこの学校では、中間前までの間にかなり勉強を進めることになっている。
しかも体育祭の準備と平行して進めなければならず、授業内容をきちんと消化できるように指導もしていかなければならないのだ。
秋の指導は生徒たちに人気で、英語は嫌いだったのに秋に教えてもらうようになってから好きになった、という生徒も大勢いて、２年、３年の英語が苦手な生徒たちも秋に質問をしてくるようになった。
他の学年の英語担当の先生に申し訳ない、と思いながらも、秋は丁寧に生徒たちに指導をしていった。
もっとも、他の学年の英語教師は、年配の男性教師と生活指導と部活指導で忙しい教師だったので、秋が、彼らの生徒たちに指導をしているというのはかえって助かるらしく、秋に、
『いつもすみませんねぇ～』と言うぐらいだった。
そのうち、放課後に補習のような形で英語クラブのようなものが出来てきた。
始めは分からない生徒たちに丁寧に教えるため、秋が放課後希望する生徒にだけ指導をしていたのだが、そのうち自分たちも教えて欲しい、と学年関係なく生徒たちが集るようになった。

それが、結局生徒たちからの要望もあり、また学校のほうでも生徒たちから率先して勉強をしようというのは喜ばしいことだということで、クラブ活動という形で勉強をする事になった。

指導はもちろん秋が行うのだが、好きな英語の歌でも、わからない授業内容でもかまわない。
中学の範囲の部分だってかまわないのだ。
とにかく、生徒たちはこの時間を秋と英語を楽しむ時間として活用し始めた。

生徒たちに英語や言葉の楽しさ、勉強をすることの楽しさを知ってもらいたくて教師を志したのだ。
こんな風に生徒たち自ら学ぼうと言う姿勢の手助けが出来て、秋はますます仕事のやりがいを感じていた。

体育祭の準備に、授業、そして、放課後の指導までこなし、体育祭が終わるまでは目の回る様な忙しさになった。
それでも、秋は教師として働ける楽しさを感じていた。

「坂井先生、俺さこの曲の意味知りたいんだよな。」
「どの曲？」
「ほら、このＵ－ＳＴＲＥＡＭの新曲だよ。」
「あっ、これは…」
「先生、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭって知ってる？」
「えぇ。知ってるわよ。」
「すごいよな。俺、ジェイの大ファンなんだ。」
「えぇー、わたしも、わたしも！」
「え、お前もなの、木崎？」

「うん！歌もいいけど、ジェイ、すごいかっこいいもん！」
「まぁ、そうだよな。まじ、すげぇカッコいいし…」
「普通の女の人たちよりも、ずっと綺麗だよね。」
「なんか色っぽいっていうか…」
「声もすごい、カッコいいし…」
「背、高くて、にっこり笑われたらもうだめぇって感じ！」
「ホント、マジ、かっこいいもんな…」
「ほんとそうだよね！！！」

生徒たちの話はＵ－ＳＴＲＥＡＭのジェイの話で一色に染まってしまったようだ。
Ｕ－ＳＴＲＥＡＭは高校生の間でも人気がある。

「それじゃ、今日はこの歌を中心に、この英文の中にある文法や言葉の意味をみんなで勉強してみようか？」
「そう、それいいかも！」
「えぇ～でも勉強…」
「フフッ。勉強っていっても、ジェイの歌の意味をきちんと追っていくために必要なところを学んでいくだけよ。だから、今日出来るところまでやると、そこまでの歌の意味をちゃんとわかるようになるし、そのところの文のつくりなんかも分かるから、きっと他のジェイの歌もものすごく良くわかるようになると思うわ。」
「え、マジ！他の歌も？」
「そうよ。でも今日習ったところの部分が他の歌にもあったらだけどね。」
「やるやる！」
「私も！」

みんな口々に、ジェイの歌をやる！と言い始めた。

「それじゃ、歌の方をやる人たちは教室のこちら側に座って。その他をやりたい人はむこう側ね。
歌以外で質問がある人は、聞きにきてくれてかまわないから。それじゃはじめようか。」

みんな勉強の楽しさを知って欲しい…
ジェイの歌のよさを知ってもらえたらいい…

秋はそんなことを考えながら、生徒たちに指導をしていった。

告白1

1学期も後もう少しで終わりになろうとしていた。

夏休みの課題の準備や、期末テストの採点、成績の準備などこの時期はとても忙しい。

それらの仕事を片付けるために、秋は毎日遅くまで学校に残っていた。

週末も学校に来て仕事をしているくらいだ。

だが、それは秋だけではないらしく、他の先生達も遅くまで残っていたり、週末出勤していたりする。

学校でしていなくても、採点を家に持ち帰ってやっている先生も多くいて本当に大変だ。

その日、秋はようやく仕事を終え家に戻ろうとしたとき、後から呼び止められた。

「秋先生、これから帰宅されるんですか？」

後から声を掛けてきたのは湊だった。

「あ、はい。湊先生も遅くまで残っていらしたんですね。」

「ええ、まぁ…でも、今日は秋先生を待っていたんですよ。」

「え…」

「これからちょっとお時間いいですか？」

「え…でも…」

秋はどうしたらいいのか迷っていた。
湊はしっかりとした目で秋を見ている。
その目には同じ職場で働くただの仲間というのではなく、秋を特別な目で見ている、という色がはっきりと出ているのだ。

きちんと断った方がいい…
秋はそう思った。

「ごめんなさい、湊先生。あの、私、そういうのは困ります。」
「…そういうのとは、どういうことですか。」
「あの…」

秋も困った。
ここでいろいろと話すようなことではないだろうし、断るにしても他の教師がいつ降りてくるか分からない。教員用の出入り口で立ったままここで話すのもまずい。

「秋先生、食事をしながら話をしたいんだ。」
「え…」
「それに、ここではまずいことは秋先生も分かってるんだろうし。」
「…」

湊は、始めからそのつもりでここで声を掛けたのだ。
ここで声を掛ければ、秋が断れないだろうと踏んだのだ。

湊としては、2人で話をしたいと思っていた。
だが、秋の様子から電話などでは絶対に返事はもらえないと感じていた。

秋が自分の事はなんとも思っていないのはわかっていた。
だが、それは自分のことを知ってもらっていないからだと湊は思っている。
同じ職場の愛美は自分に気があるようだが、湊には全く興味が無い相手だった。

愛美から、秋には恋人がいるときかされたが、だからどうだと言うのだ。
それに、秋が男と会っているような気配は全く無い。
自分や他の男を遠ざけるために、わざとそんな嘘を言ったのではないかと湊は思っていた。
それならもっと近づいて、自分の気持ちを伝え、自分のことを知ってもらいたいと思ったのだ。

「秋先生、別に襲うつもりはありませんから、そんなに困ったような顔をしないで下さい。」
「…え…」
「とりあえず、行きましょう。」

湊は秋に声を掛け、ゆっくりと話が出来るように食事に連れ出した。

食事をしながら学校での様子を話し、ギクシャクした雰囲気が少し和んだところで、湊が話を切り出した。

「秋先生、俺とちゃんと付き合いませんか？」
「…それは、ごめんなさい。出来ません。」
「どうして？俺のことを知らないのなら、これから知っていけばいいでしょう。」
「そういうことではないんです。私には、湊先生に特別な感情はあ

りませんから。」
「今はそうかもしれませんけど、それはこれから付き合っていけば…」
「それに、私にはもう決まった人がいることを湊先生はご存知でしょう。」
秋は自分を見つめている湊に向かってはっきりと口にした。
「それは、他の先生から聞きました。」
「それなら、私が湊先生とお付き合いできないって分かっていただけますよね。」
「…秋先生、本当に他に恋人がいるんですか？」
「え…」
「秋先生はいつも遅くまで学校で仕事をしているし、週末もほとんど学校で仕事をしていますよね。
仕事をしている以外に時間はないようですね。それでは恋人がいると言っても信じられません。
俺を遠ざけるためにそんなことを言っているとしか受け取れません。」
「…湊先生…」
「俺が嫌い、と言うことですか？」
「…湊先生、先生がどう思われていても私には決まった人がいます。」
「でも、その恋人はどこにいるんです？」
「湊先生には…そうですね…ちゃんとお話したほうがいいかもしれませんね。真剣に思っていて下っているようですし、なおさら嘘をつくのは失礼ですから。」
「秋先生、それじゃやっぱり恋人がいると言うのは嘘なんですね。」
「湊先生…恋人…という言い方は正確では無いのかもしれません。」
「やっぱり…」

「私には恋人がいるんではなくて、夫がいるんです。」
「え…」
「私、結婚していますから。」

告白2

「…結婚…？」
「はい。」
「でも…」
「お互いの仕事の関係で、今は別々に暮らしています。」
「え…」
「私の夫はイギリス人ですから…彼は…今、イギリスにいます。」
「そんなこと…」
「ですから週末デートも出来ないし、２人で一緒にいるところを見かけることって無いと思いますよ。
電話代がすごくかかっちゃいますけど、今は仕方ないですから。」
「結婚って…でも…秋先生はまだ…」
「私、１８で結婚したんですよ。彼も１８でしたから。」
「え…」
「あっ、子供が出来たからとかいうわけじゃないですよ。」
「……」
「お互いにとても大事な人で、これから勉強をしていくのに今はどうしても一緒にいられなかったので…」
「秋先生…」
「彼は、その時一緒に居れても居れなくても、すぐ結婚するって決めてたみたいですけど。」
秋は少し恥ずかしそうな表情をしながら、ちょっと肩をすくめて見せた。
「…それじゃ、本当に…」
「えぇ。湊先生のお気持ちを受け入れることは出来ないんです。私

は、彼じゃないとだめなので。」
「秋先生…」
「ごめんなさい、湊先生。」

秋の話し方で、それが作り話ではない、と湊は感じた。
秋には本当に決まった人がいたのだ…
湊は大きく一つため息をついた。

「結婚してるんじゃ…あきらめるしかないってことか…」
「すみません。」
「相手がいても奪ってしまおうと思ってたんだけどな。秋先生のその様子じゃ無理っぽいですね。」
「無理ですね。」
「…秋先生のご主人って、そんなにカッコいい奴なのかな？」
「カッコイイですよ。」
「俺よりも？」
「はい。」
「即答ですか…。」
「だって、本当にかっこいいんですから。」

秋は悪びれもせず、嬉しそうにニコニコと自分の夫のことを話した。

「…正直、自分でもそれなりに自信あったんだけどね。」
「あぁ、そうだと思いますよ。湊先生、十分素敵ですよ。」
「でも、秋先生のご主人はその上なんでしょ。」
「はい。もう、目眩がするくらい。」
「…のろけてます？」
「あ、わかります？」
「…はぁ…一応、俺振られたんだから、あんまりいじめないで下さいよ。」

「そうですけど、でも、一生懸命お断りしているのになかなか引き下がっていただけなくて、私も大変だったんですよ。」
「そりゃ、好きだから仕方がないでしょ。」
「すみません、湊先生。」
「…秋先生、…すみませんって…あんまり思ってないでしょ。」
「ちょっとは思ってます。」
「ちょっとだけですか？」
「ちょっとだけです。」
「全く…もう完敗です。」

完全に諦めがついたのか、湊とは逆に打ち解けたように話をすることが出来た。

「秋先生、どうして結婚していることを秘密にしてるんですか？」
「あぁ、それは秘密にしてるわけじゃないんです。」
「だって、みんな秋先生は独身だと思ってるし。」
「それは私の年齢を考えてだと思います。校長先生には私は既婚者だと伝えてありますし、ちゃんと書類にもそう記入してあります。」
「え、そうなんですか？」
「そうですよ。でも、プライバシーにかかわることなので、そういうことってわざわざ表に出したりしないでしょ。それに、自分からいい触れ回ることでもないし…」
「そりゃ、まぁ…」
「それに…」
「…？」
「実は、教頭先生からまだ独身の女性が多いからあんまり刺激をしないように、結婚してるというよりは恋人がいる、位にとどめておくほうがいいですね、って言われたんですよね…」
「え…」
「隠すことではないのでもちろん、みなさんに結婚していることが

分かったらそれでもいい、という前提でそういう風になったんですけど。」
「え、そうだったんですか。」
「はい、私の結婚した年齢が早かったことと…それに彼のこともあるし…」
「秋先生のご主人のこと？」
「えぇ。彼は外国人ですから、いろいろと聞かれてそれに答えていくのもちょっと…」
「あぁ、確かにそうですね。女性は特にそういう話が好きでしょうから。」
「はい。」
「分かりました。それなら俺も黙っていますよ。秋先生のことは。」
「湊先生…」
「まぁ、でも、秋先生と話すとやっぱりいろいろと刺激もあるし、話してて楽しいですよ。恋愛感情抜きで友人としていられたらナと思いますね。」
「湊先生って…大人ですね…」
「うーん、まぁ切り替えしが早いのか…」
「それに、女性経験豊富そうですものね。」
「…秋先生…」
「違います？」
「否定できません。」

始めてちゃんとした友人として、2人は大笑いした。

「秋先生のご主人に会って見たいですね。どうやって先生を口説いたのか、教えてもらいたいな。」
「それは…まぁ…そのうちに会えると思いますけど…」
「いつごろですか？」
「さぁ？」

「秋先生？」
「彼の仕事にもよると思います。」
「忙しそうですね、ご主人。」
「忙しいですね。とっても。」
「どんな仕事をしてるんです？」
「秘密です♪」
「は…？」
「そのうち…分かるかもしれません。」
「秋先生…」

秋は楽しそうにニコニコと笑っている。
湊もあきらめたようにため息をついた。

告白3

夏休み前の最後の英語のクラブ活動をしているときに生徒がＵ－ＳＴＲＥＡＭの話をし始めた。

「坂井先生、この夏初めてＵ－ＳＴＲＥＡＭが日本にくるんだよ！知ってた？」

「それは、ね。知ってるわよ。」

「やっぱ、坂井先生もＵ－ＳＴＲＥＡＭのファンなんだ。」

「うーん、まぁそういうことね。」

「先生チケット取った？」

「…チケットは…」

「あぁ、やっぱり先生も無理だったんだ。俺もだめだったんだよな…」

「フフフ…♪私とったよ！お兄ちゃんの会社がスポンサーやってるらしくて、もらっちゃった♪」

「あぁーずりー！！！」

「俺もチケットゲットしたぜ。」

「えぇー、何でだよ。お前もコネかよ！！！」

「いや、俺、電話しまくったもん。」

「俺だって、でも電話つながんねぇーし…」

「ま、日ごろの行いの差だな。」

「なんだよ、そんなの関係ねぇーだろ。」

Ｕ－ＳＴＲＥＡＭ初の日本公演のことで生徒たちは盛り上がっている。

「ほら、みんな。チケットのことは後で話して頂戴。今日は、夏休

み前最後だから、特別にＵ－ＳＴＲＥＡＭの曲を流して、それを使って進めましょう。」
「えー、先生、曲流してくれんの？」
「えぇ。紙とにらめっこよりも、実際に耳で音を聴き分けてもらおうと思って。」
「Ｕ－ＳＴＲＥＡＭの曲だったら、俺ばっちり歌えるぜ！」
「そう？」
「任せてよ。」
「それじゃ、みんなで始めてみるね。」

クラブ活動が終わり職員室に戻ってみると、田上が秋を待っていたかのように声を掛けた。

「秋先生！」
「田上先生…」

湊にはきちんと断りを入れたが田上とはそういう話をしたわけではない。
以前とは違って、湊とは仲のいい友人として気軽に話をするようになったが、田上は湊と秋が最近仲良くなったと勘違いしているらしく、以前より頻繁に声を掛けてくるようになった。

田上先生にもちゃんと断らないと…

一つ小さくため息をつくと、秋は田上の方に向かって返事をした。

「田上先生、あの、なんでしょうか？」
「秋先生、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭのチケット取れました？」

「あ、それは…」
「やっぱりチケット取れなかったんですね。」
「え、いえ、あの…」
「僕、取れたんですよね、チケット。一緒に行きませんか？」
「え…あ…ごめんなさい。別の方を誘ってください。」
「え、秋先生、行かれないんですか？」
「…あ、私、行きますけど…」
「先生もチケット取ったんですね。それじゃ、一緒に行きましょう。」
「え…あの、ごめんなさい。それはもう約束があるので…」
「…それって…湊先生と…ですか？」
「は？」
「約束って、別の人と行くってことですよね。」
「……」
「俺がどうしたって…？」
「あっ、湊先生…」

秋と田上が話しているところへ湊が職員室に入ってきた。

「田上先生、秋先生が困ってるんじゃないですか？こんなところで個人的な話をしていたら。」
「あっ…」

秋を見ると、確かに困った顔をしている。

「今は、たまたま来たのが俺で他に先生方がいなかったから良かったけど、他の先生がこんな様子を見たらどう思う？」
「それは…すみません…あのでも…」
「…秋先生、夜、呑みに行きませんか？田上先生も一緒に。」
「え…」

「別に予定は大丈夫ですよね。」
「えぇ…」
「田上先生は？」
「僕はもちろん空いてます。」
「それじゃ、今日、夜行きましょう。」

告白4

「…それで…秋先生は湊先生と付き合ってるんですか？」
「そうだったらどうする？」

3人で飲み始め、少し食事もお酒も進んだところで田上がとうとう話を切り出した。

「え…じゃぁ、秋先生は…もう…」

田上ががっくりとした様子を見せる。

「はぁ～、もう、湊先生、誤解するようなことを言わないで下さい。」
「えっ、じゃ、秋先生、湊先生と付き合ってるわけじゃ…」
「違います。」
「それなら、僕の彼女になってください！」

お酒を飲んでい、酔った勢いもあるのか、田上が秋に言った。

「ごめんなさい。それは無理です。」
「え、どうしてだめなんですか？」
「私…もう決まった相手がいますから。」
「…恋人…ですか…？」

秋は答えるか、どうしようか、考えあぐねているようだ。

「秋先生、田上先生も本気みたいだし、ちゃんと言った方がいいで

すよ。」
「…そうですね…」
「ちゃんと言うって…湊先生、お2人って何かあるんですか…？」
「…あったらいいですけどね…」
「湊先生…」
「田上先生、俺も振られたんですよ。」
「え…」
「秋先生、田上先生にもはっきり言った方がいいと思いますよ。」
「…そうですね…田上先生。」
「秋先生…」
「私…結婚してるんですよね。」
「…え…」
「それって…」
「秋先生は、人妻ってことですよ。」
「それは…え…えぇ…！ちょっと待ってください、秋先生ってまだ若いんじゃ…」
「若いですけど、結婚してます。」
「だって、秋先生、まだ22でしょ。」
「私、18のときに結婚しましたから。」
「18って…」
「もうすぐ結婚して5年になりますね♪」
「え！！！」＞BR＜
「あ、相手は？先生、相手は誰なんですか？」
「学校の同級生です。」
「同級生…」
「イギリスにいたときの同級生ですよ。田上先生。」
「…そんな…」
「私は日本で仕事をしていますけど、彼は違いますから、だから今は別々に暮らしていますけどね。」
「別々に…ですか？」

「はい。私も彼も、自分たちのやりたいことがあるので、そうすることに決めました。」
「…寂しくないんですか…？」
「…そう思うときもありますけど、彼がすごく頑張っているので、私も頑張らないとって思ってます。」
「でも、それじゃなかなか会えないんじゃ…」
「会えないですね。」
「秋先生…」
「お互いが、それぞれ頑張ろうって決めたことですから。」
「…そうですか…」
「…というわけだ。」
「湊先生…」
「秋先生、良く…頑張りますね。」
「そうですね。でも、電話代すごいですから…」
「…そうでしょうね…」

田上が一つ大きくため息をついた。

「秋先生の旦那さんに会ってみたいですね…」
「…彼に…ですか…？」
「そうですよ。」
「俺も是非会いたいですね。」
「そうですねぇ～…」
「ご主人は戻ってこないんですか？」
「…今度…日本に来るみたいですけど…」
「えっ、そうなんですか？それなら是非…」
「あ…でも、すごく忙しいみたいなので…」
「…そんなに忙しいんですか？…」
「えぇ…」
「何の仕事をしてるんです？秋先生のご主人。」

「…仕事…ですか…？」
「俺も聞きたいですね。この間、秘密って言われちゃいましたから。」
「……うーん……やっぱり…秘密ですね。」
「秋先生！」
「だって、彼に迷惑がかかっちゃいますから。」
「どうしてですか？何か知られちゃまずいことでもあるんですか？」
「…あるような…無いような…」
「秋先生？」
「あの、彼には伝えておきます。」
「そうですよ。今度、ご主人とも一緒に飲みたいですね。」
「…それは…多分無理だと…」
「どうしてですか？」
「たぶん、無理だからです。」
「なんだかなぁ～」
「…秋先生…ご主人って…いや、いいです。」

湊は何かいいかけたが何かを考えるように言葉を止めると、秋の方を見ている。

田上は、何度もため息をついていた。

夏休み1

学校は夏休みに入り、職員室にいる教師の数もまばらになる。
秋は資料を作ったり整理をしたり、また2学期以降に行う授業についての準備や、希望生徒の補習授業の準備などをしていた。

「秋先生、今日も学校に来てるんですね。頑張りますね。」
「田上先生、先生こそ今日も部活ですか？」
「まぁ、そんなところです。」

田上と湊、そして秋の3人で飲みにいって秋が結婚していること告げた後は、田上は以前のように秋をああいう形で誘うことはなくなっていた。それでも秋によく話しかけてくるが、同じ仕事場の仲間という感じだ。
湊も、前以上に秋に気軽に話しかける。

「もうすぐ、U－STREAMの日本公演ですね。」
「あ、そうですね。」
「秋先生も行かれるんですよね。」
「えぇ…」
「ご主人と…？」
「…それは…まぁ、いろいろとあるので…」
「お一人で行かれるんですか？」
「…そういうことになりますね…」
「それなら一緒に行きましょうよ。」
「……」
「秋先生？」

「ごめんなさい、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭのコンサートは一人で行くと決めているので、田上先生はどうぞ別の方といってください。」
「え、でもせっかく同じ会場に行くのに…」
「会場へ行く前にいろいろと用事もあるので…ごめんなさい。お約束は出来ないんです。」
「はぁ～…しょうがないですね…」

田上は大きくため息をつく。

「秋先生、ほとんど毎日学校来てるんじゃないですか？」
「そうですね。家に居ても別にすることが無いですし、ぼぉーっとしてるんだったら、仕事をしている方が楽しいですから。」
「楽しい…ですか？」
「えぇ、とっても。」
「すごいなぁ…」
「だって、私ずっと教師になりたかったんですよ。子供たちに勉強の楽しさを知って欲しくて。」
「…そうなんですか？」
「はい。だから今、頑張れるわけなんです。」
「…本当に頑張ってますよね。秋先生の補講、すごく分かりやすくて生徒に評判いいですからね。」
「それはすごく頑張ってますから。」
「昨日も教材作ってましたよね。」
「えぇ。少しでも生徒たちが興味を持つように、それからより分かりやすいように考えてます。」
「僕も、秋先生のような先生に英語を教わりたかったですよ。」

田上は笑いながら自分の席のほうへと向かっていった。

田上が職員室から出て行った後、有吉が入ってきた。

「秋先生！」
「有吉先生、先生も今日は出勤されていたんですね。」
「秋先生もでしょ。毎日来てるみたいだし、すごいわね。」
「そんなこと無いですよ。まだ分からないことも多いし、資料や教材ももっと作ってみたいですから、夏休みは時間があって、ちょうど時間を掛けてじっくり作成出来ます。」
「頑張ってね。」
「はい。」
「ねぇ、それよりも秋先生はＵ－ＳＴＲＥＡＭのコンサートには行かないの？」
「え…行きますけど…」
「本当！秋先生、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭのファンだから絶対行くと思ったの。」
「えぇ…」
「私も行くの！一緒に行かない？」
「あ、ごめんなさい先生。コンサートに行くことは行くんですけど、ちょっと用事があってたぶん一緒に行くのは時間的にも無理かなって…」
「そうなの…どうしてもだめ？」
「えぇ。用事が、たぶんギリギリか、ちょっと超えるかかると思うので、遅れてしまうかもしれないんです。だからご一緒させていただくと先生にも迷惑がかかるので…」
「え…そっか…それじゃ、しょうがないかな…」
「有吉先生もＵ－ＳＴＲＥＡＭのファンなんですか？」
「んー実は、この間、田上先生からＵ－ＳＴＲＥＡＭのＣＤ借りたんだけど、聞いてからすっかりはまっちゃったのよ！」
「そうなんですか…」
「だから、一緒に行く人がいればナって思ったんだけどね…」

「あの…田上先生は行かれるみたいですけど？」
「え…ウン…そうみたいだけど…」
「有吉先生…？」

有吉の顔が心なしか少し赤くなっている。

「先生…あの…田上先生のこと…」
「え…！やだ、違うって…あ…あのね…あっ、ほら、田上先生、私と行くのは同じ職場の人間だから気にするかなって思ったから。」
「…先生…」
「あ、あの…秋先生は、ほら、同じ女性同士だし…ね…あっ、私、もう行かなきゃ。
そっ、それじゃぁ、秋先生、またね。」

顔を赤くしながら、有吉は職員室を出て行ってしまった。

夏休み2

Ｕ－ＳＴＲＥＡＭの日本公演の日が近づいてきた。
補習に来ている生徒たちもなんとなくそわそわしているようだった。

「先生、明日、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭのメンバー来日するんだって！」
「そう。楽しみね。」
「俺、もう今からドキドキだよ！」
「そう、それじゃ、今日は補習の後でＵ－ＳＴＲＥＡＭの歌を勉強しよっか？」
「まじ！それいい！！」
「補習の後、希望者だけＵ－ＳＴＲＥＡＭの歌の特別講義をしましょう。」

生徒たちはいつも以上に補習授業に取り組んだ。

職員室に戻り、秋はほっと一息ついた。
明日はＵ－ＳＴＲＥＡＭのジェイたちがやってくる。
日本公演はその2日後だ。

やっと会えるんだ…歌が聞ける…

秋自身も、ずっと楽しみにしていた。

職員室に、田上が入ってきた。

「秋先生！明日ですよ！Ｕ－ＳＴＲＥＡＭが来日しますね。」
「そうですね。」
「秋先生…本当に一緒に行きませんか？」
「ごめんなさい。無理です。」
「そうですか…仕方ないな。僕一人で行くかな…」
「え…田上先生、他のどなたかと行かれないんですか？」
「行かないですよ。だって、他に誰かいます？」
「え…あの…」

秋は有吉のことを考えていた。
自分から言っていいものかわからなかったが…さりげなく口にする、と言う形ならいいかもしれない、そう考えた。

「あの、有吉先生も行かれると伺ったんです。」
「え、有吉先生がですか？」
「はい。ご一緒に、と誘われたんですが、田上先生にも申し上げたように、私自身、その前に用事があるので、とお断りしたんです。有吉先生もお一人で行かれるようでしたから…」
「…そうですか…有吉先生に聞いてみようかな…」
「それがいいかもしれないですね。」
「僕も、一人で行くより、知っている人と一緒に楽しみたいですからね。」
「そうですよね。」
「今日、有吉先生、学校へいらしてますか？」
「いらしていますよ。さっき、１年生の教室で見かけましたから。」
「それじゃ帰ってしまう前、今から聞いてきます。」

田上は仲間を見つけたのが嬉しかったらしく、そのまま職員室を出て有吉のところへ向かったようだ。

秋はその日、遅くまで学校に残り、仕事を進めてから家に戻った。

Ｕ－ＳＴＲＥＡＭの公演日当日、田上は有吉との待ち合わせ前にゆっくりとＣＤでも見ようと、約束の時間よりもかなり前に出てきた。

ＣＤを見ようと店に向かっていると、ふと、たくさんの荷物を持った女性が目に留まった。

「あれ…秋…先生…？」

田上がその女性のほうに駆け寄り、声を掛けた。

「秋先生！」

「え…」

「やっぱり秋先生ですね。どうしたんです？すごい荷物ですね…」

振り向いた女性はやはり秋だった。

すごい荷物を両手いっぱいに持っている。

秋に近づくと…田上は何かに気づき…困ったような顔をして秋にたずねた…

「秋先生…あの…その…首のところにある…あっ、首だけじゃないですね…いろいろ…」

「えっ…」

「それって…虫刺されじゃ…無いですよね…どう見ても…」

「あっ……」

秋が自分でも気づいたのが、顔を真っ赤にした。

「ご主人…戻ってこられたんですね…」
「えぇ……」
「なんか…すごいな。」
「…あ…の…」＞ＢＲ＜
「見せ付けられるっていうか、なんていうか…」
「あ…す…すみません…」

さらに真っ赤になった秋を見て、やっぱり可愛い…と田上は思ってしまった。
秋先生にこんなにキスマークをつけやがって…
まだ会ったことの無い秋の夫にやきもちを妬いてしまう。

あきらめた、とは言っても、本当のところ、秋への想いが完全に消えてしまったわけではない。
一緒に学校で仕事をしていると、秋にますます目が行ってしまうし、秋のことを知れば知るほど、あきらめ切れない自分を知ってしまった。
やっぱり他の女性にはなかなか目を向けられないし、彼女は特別だと思ってしまう。

彼女は自分のものだ！と言わんばかりに、あからさまにキスマークをつけているのだ。
それも誰が見てもはっきりと分かるところだ。

そういえば秋の夫は彼女と同じ年だと聞いている。
まだ若いんだな…そりゃ、独占よくもあるはずだ。
それに離れて暮らしていればなおさらだろう…

田上は一つため息をついた。

「秋先生、すごい荷物ですね。」
「あぁ、これは主人から頼まれたものなので…」
「え、秋先生のご主人、秋先生にこんなに持たせてるんですか！自分で買いに来ればいいじゃないですか！！！」
「え…田上先生…？」
「だって、どう見たって、秋先生、大変そうじゃないですか！」
「そうですけど…主人は仕事なので…私は今日はお休みですし…」
「でも、秋先生…」
「いいんです。日本にいても仕事をしなければならない主人の方が大変ですから。」

秋はそういうとにっこりと微笑んで、荷物を持って歩き始めようとする。
田上もあわてて後をついていく。

「秋先生、それなら荷物を運びますよ。そんなにたくさん、一人で運ぶんじゃ大変でしょ。」
「えっ！！！」

秋が驚いた表情をした。

「大丈夫です。必要な物を買ったら、タクシーで戻りますから。」
「タクシーって…」
「それよりも田上先生、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭの公演、有吉先生と待ち合わせしているんじゃありません？」
「そうですけど…まだ時間はありますし…」
「私は大丈夫ですから。」
「でも、秋先生…」
「あの、本当に大丈夫ですから。もうすぐ買い物も終わりますし、

タクシーで戻ったら私もＵ－ＳＴＲＥＡＭの公演に行きますし、時間もギリギリですからもう行きますね。」

「えっ、秋先生！！」

秋はそのまま歩き出して行った。

夏休み3

田上は秋のことを追って歩き出す。

「秋先生、僕はまだ時間がありますし、ちょっと時間をもてあましていたところなんです。
だから秋先生が買い物をしている間くらい荷物を持っていますよ。
そんなにたくさん持ってて大変そうじゃないですか！」
「…田上先生、本当に私のことは大丈夫ですから。」
「だめですよ。こういうときくらい同僚に甘えてください！」

田上は秋の手から無理やり荷物を取ると、自分が持って歩き出した。

「さぁ、秋先生、今度は何を買うんですか？」
「え…」
「早くしましょうよ。秋先生は、買い物の後一度戻らないといけないんでしょ。
早くしないとＵ－ＳＴＲＥＡＭの公演に間に合いませんよ！」
「それは…」
「ほら、早くしましょう。僕だって、有吉先生を待たせるわけには行きませんから。」
「田上先生…ですから、私は買い物は一人で…」
「だめですよ。秋先生が買い物が終わって、ちゃんとタクシーに乗るまでは荷物は持っていますから。」
「え…」
「だから、早く買い物をすればいいんですよ。」

田上はどうあっても秋の荷物を離そうとしない。

秋は仕方ない、と言う風にため息を一つついて、これはもう買い物を早く終わらせるしかないと思った。

ようやく全て必要な買い物を終わらせると、秋は田上にお礼を言って、タクシーに乗り込んだ。
そのタクシーを田上が見送る。
秋が田上に申し訳ないと思ったのか、てきぱきとすばやく買い物を終わらせたので有吉との待ち合わせに遅れるような心配は全くなかった。
田上としては出来ればもっと秋と一緒にいたかった、と言うのが正直な気持ちだ。
恋人同士が一緒に買い物をする…少しだけそんな気分を味わえた。

それにしても…秋はいろいろな物を買ったようだ。
それに、何かオーダーしておいた物を取りに行ったような感じもした。
出来上がっていたものは男物だ。かなり大きいものだったから、それを着る男の背丈は田上より少しあるのかもしれない。
田上は１７８ｃｍある。それよりも大きいのだろう。

それにいったい彼女はどこへ帰るつもりなのだろう。
タクシーの走っていった方角は…彼女のアパートのある方向ではなかった…

田上は腑に落ちない顔をしながら、有吉との待ち合わせ場所に向かって歩き出した。

秋はタクシーに一人で乗ると、ほっと息をついた。
まさか、ここで田上に会うとは思っていなかった。
しかも買い物まで見られてしまった…
田上が何も気づいてなければいいと思うのだが…

秋は頼まれた買い物のリストをもう一度チェックし、買い忘れがないことを確認してそのリストをかばんにしまうと、今度はサングラスと帽子、それに薄手のジャケットを着て首からスタッフカードをぶら下げた。

向かっているのはコンサート会場。
今晩、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭが日本公演をする会場だ。

スタッフ専用の入り口から入り、荷物を持って中へと進んでいく。
スタッフ証を警備員が確認し、中へ通される。

会場の中で、大勢のスタッフがみんな忙しく動いている中、
秋もＵ－ＳＴＲＥＡＭの控え室に向かって荷物を持って歩いていく。

控え室に着き、ドアをノックすると、返事が聞こえてくる。
ちょうどリハーサルが終わって、控え室で休憩しているようだ。
秋は自分の名前を告げて、控え室の中へ入っていった。

夏休み４

「ジェイ、頼まれたもの買ってきたわ。」
「サンクス、ハニー！」
「あのね…でも…」
「どうしたの？」
「同じ学校の先生に見られちゃったのよ…」
「見られたって？」
「買い物しているところ。」
「それが？」
「だって、まずいでしょ…」
「どうして？」
「だって…その先生…私が荷物をたくさん持ってるからって…手伝うって言い出して…」
「…シュウ…」
「それで…日本で急遽オーダーしたジェイのジャケット見られちゃって…」
「見られたらまずいの？」
「だって…その先生、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭの大ファンなのよ…。今日の公演も見に来るし…このジャケット着てるところ見られたら…」
「俺は別にかまわないよ。シュウと俺のことは、ここに居るメンバーはみんな知っていることだしね。」
「でも、でも…まだ公になっているわけじゃないし…それにジェイのファンの人たちはあなたが結婚してるって事だって知らないのに…」
「シュウ、俺はいつでも言ってかまわないって言ってるだろ。でも、シュウの仕事のことを考えて、シュウがいいって言うまで言わないことにしたんだから。」

「…だって…」
「わかってるよ、シュウ。シュウが俺のワイフだってわかったら、学校で教えてなんかいられないもんな。」
「…う…ん…ごめんね、ジェイ…」
「いいよ。学校の先生になるのがシュウの夢だったんだから。」
「ウン…」

ジェイが秋をしっかりと抱きしめた。
ジェイが秋のあごに手を掛け上を向かせた。そして、ゆっくりと秋にキスを落とす。

「俺はそいつがシュウと一緒に買い物をしたっていう方が気に入らないな。」
「ジェイったら…」
「シュウ…ずっと会いたかったんだからな…」
「それは私だっておんなじ…」

ジェイはシュウを自分の腕の中に抱きしめたままだ。
そのとき控え室のドアが開き、Ｕ－ＳＴＲＥＡＭの他のメンバーが入ってきた。

「シュウ！買い物してきてくれたんだ！サンキュー！」
「みんなから頼まれたものはそこにあるわ。」
「ジェイ、一昨日からシュウを離そうとしないよな。」
「ホント、あれだけもてるのに、シュウ一筋だからな。俺、尊敬しちゃうよ。」
「まぁ、でもシュウみたいな子が恋人だったら、俺も浮気とかしないだろうな…」
「シュウはジェイの恋人じゃなくて、ワイフだからさ、やっぱジェイには特別なんだろうな。」

「そりゃそうだろ、あんなにいっぱいキスマークつけちゃってさ。」
秋は自分のことを言われて真っ赤になる。
ジェイはそんな秋が可愛くてたまらずに、また彼女の頬にキスを落とした。

「あぁ〜ぁ…まったく、まただよ、ジェイは。」
「いいだろ。シュウが俺のところにくるときしか会えなかったんだぞ。今回、初めて日本に来れたんだからな。」
「そりゃ、ま、そうだけどさ。」
「でも、シュウ、良くそれで外、歩けたよな…」
「え…ウン…恥ずかしかった…」
「そうだろうな…それだけつけられたらな…」
「あのね、みんな、…これ…同じ学校で働いている他の先生に見られちゃったの…」
「そいつ、男?」
「…ウン…」
「シュウ、さっき言ってた先生って…男なんだ…」
「そうだけど?」
「……」
「それで、これみて、ご主人戻ってきたんですね…って言われたの…」
「そうだろうな…」
「バレバレだな…」
「すごい恥ずかしかった…」
「男の先生ならなおさらだな。その男、シュウに気があるんじゃない?」
「え…」
「やっぱり…シュウ、可愛いから、結構もてるんじゃない?」
「え…そんなこと…」

「おい、ウェス、あんまりジェイを挑発するなよ…」
「おッ…ジェイ…なんかにらんでるよな…」
「だから言っただろ。」
「シュウ…その男、シュウに言い寄ってきたわけ？」
「え…う…それは…」
「そうなんだ…」
「ウン…あの、でもちゃんと断ったよ。私は結婚してるからって。」
「それでその男は納得したわけ？」
「そうだと思うけど？」
「思う？」
「だって…」
「シュウ…」
「あっ、でも今日のコンサートは別の女の先生と一緒に来るって言ってたから…」
「ふ～ん…」
「あっ、それに、ジェイに会ってみたいって言ってた。」
「会う？」
「あぁ、あのね、私の夫に会ってみたいって、そういう意味で言ったんだと思う。」
「…シュウは何て答えたの？」
「え、忙しいから無理って。」
「…俺、会ってみるかな…」
「えっ！だめだよ、ジェイ！そんなこと。」
「だって、そいつ、俺に会ってみたいんだろ。」
「それは、そう意味じゃなくて…」
「じゃ、どういう意味？」
「……」

他のメンバーがジェイに声を掛けた。

「ジェイ、あんまりシュウをいじめるなよ。今日だって、俺たちのためにこんなにたくさんの荷物になるくらいショッピングに行ってくれたんだ。他のスタッフには頼めなくても、俺たちのことをわかってるシュウになら頼めることってあるだろ。それにここは日本だから、俺たちには全然分からない土地なんだしさ。」
「…そんなことは分かってる。」
「ジェイ、だったら…」
「だけどさ、シュウは俺の妻なんだ。俺のシュウなんだ。他の奴になんか…」
「ジェイ…」
「あの、あのね、ジェイ。私、ジェイが、ジェイたちがすごく頑張ってるから、私も頑張ろうって思うの。
ジェイはちゃんと自分の夢を実現させて頑張ってる。だから私も、ちゃんと頑張ろうって思ってるの。
そうじゃないと、ジェイに恥ずかしいもん。」
「シュウ…」
「学校で仕事して、生徒たちのために資料を作ったり教材や授業内容をチェックしたりしてるんだ。
それに家でも仕事、頑張ってるの。」
「……」
「家で仕事をするときは、U－STREAMの音楽をかけるの。実は、学校でも生徒たちにU－STREAMの歌を教えてるんだ。」
「そうなんだ…」
「なかなか一緒にいられないけど…仕事してても私はジェイのことを考えてるし、仕事してないときはジェイのことしか考えてない。」
「シュウ…俺だって…いつだってシュウのことしか考えてない…」
「ウン。今日は、本物のジェイの歌が、U－STREAMの音楽が聴けるんだよね。すごく楽しみにしているから。」

「わかった、シュウ。」
「シュウ、俺たちの最高の音を聞かせてやるよ。」
「ウン、ウェス、みんなも、頑張ってね。私ももちろん、U－STREAMのファンが日本にはいっぱいいるんだよ。」
「あぁ。でも、やっぱ、シュウに聞いてもらいたいって、俺たちも思うよ。」
「ウン、ありがとう。」
「シュウ、俺は、今晩はシュウのために歌うから…」
「うん、ジェイ…」

夏休み5

もうコンサート会場は集った人たちですごい熱気だ。
チケットだってほとんどすぐに完売したらしい。
田上だって、知り合いに頼まなければ入手することが出来なかっただろう。

「田上先生、すごいですね…Ｕ－ＳＴＲＥＡＭの人気って…」
「あぁ、本当にそうですね。僕もビックリしましたよ。」
田上と有吉の周りはＵ－ＳＴＲＥＡＭのファンでいっぱいだ。
「こんなに大勢の人たちじゃ、秋先生は見つけられないな…」
田上はポツリと秋のことを口にした。
有吉は黙ってそれを聞いていた。

間もなく、会場が静かになった。
いよいよＵ－ＳＴＲＥＡＭの公演が始まる。

会場は真っ暗になり、ステージにだけ明かりが灯される。
テンポのいい音楽が流れ始め、会場から拍手が沸き起こる。
そして…ステージの中央、奥からゆっくりとボーカルのジェイが現れた…

「すごい…」
「もう、たまらないですね！」

田上も、有吉も、本物のＵ－ＳＴＲＥＡＭの音楽を聴いて、ただもう呆然としていた。
音楽の完成度もすごいが、ジェイの生の歌声はもっとすごい。
本当に人の心の中に入り込むようなそんな声を持っている。
それにもちろんルックスもだ。
ジェイが視線を動かすたびに、会場のあちこちからため息や叫び声が聞こえる。

男の田上の眼から見ても、間違いなくいい男だと感心せずにはいられない。
整った顔立ち、足が長く、長身で均整の取れた体付をし、そして、なんと言ってもジェイの最大の魅力はそのルックスではなく声なのだ。聞いていて、本当に切なくなる…、何度でも聞いていたくなる声をしている。

公演の最後の方に、ジェイが歌ったバラードは圧巻だった。
会場のいたるところからすすり泣く声が聞こえ、有吉も泣いていたし、田上も目頭を押さえなければならないほど本当に心の中に入り込んできた素晴らしい曲だった。甘く切ない歌詞…ジェイはどうやってこんな曲を作っているのだろう…
ジェイはどんな気持ちで歌を歌っているのだろう…このバラードは誰かを想っている歌だ。
Ｕ－ＳＴＲＥＡＭの歌が好きで、そのために英語を少しずつ勉強してきたのだ。
だから、田上にだって歌の英語は多少分かる。
ジェイはいったい誰のことを想ってこんな歌を…そう考えずにはいられないほどだった。

秋は先ほどからジェイの腕の中で泣きっぱなしだった。

「シュウ、ほら、もう泣き止んで…」
「だっ…て…ジェイの歌…」
「シュウのことをずっと想って作った曲なんだから…」
「う…ん…」
「俺の気持ち、ちゃんと伝わったでしょ。」
「うん…ジェイ…私…」

ジェイに声を掛けられると、ますます秋の目から大粒の涙が溢れてくる。

「あ〜ぁ…ジェイ、シュウを泣かしちゃったよ…」
「いやでも俺わかるな…」
「何が？」
「だってさ、ジェイの歌、すげぇ良かったしさ。」
「…まぁな…」
「やっぱシュウがいると違うんだな…」
「そりゃそうだろうな…ジェイの作る歌、絶対シュウのこと考えながら作ってるよ。」
「あぁ、俺もそう思うけどさ…」
「俺、今日、バックで演奏してて自分でも感動しちゃったんだよな…」
「やっぱりな…お前、そのとき演奏ミスっただろう…」
「…分かった？」
「そりゃ分かるよ。」
「なんか俺までジーンとしちゃってさ…」
「まぁ、気持ちはわかるけどな。」
「そうだろ。」
「俺もだよ。自分の女に会いたくなった…」

「お前もかよ…」

メンバーはみんなで仕方ないな、という顔をしている。
少し落ち着いた秋はもう大丈夫だから、と言って、ジェイの腕の中から離れようとする。
だが、ジェイは秋を離さない。

「ジェイ…あの、まだこれから片付けとかあるでしょ。私、お邪魔だろうからまた後で…」
「シュウ、シュウはここに居ればいい。俺と一緒にね。」
「え、でもそれじゃみんなが…」
「俺たちのことは気にしなくていいからさ、シュウ。」
「でも…」
「そうそう、ホント、気にするなよ。」
「…だって…」
「ジェイは日本に来るのをすごく楽しみにしてたんだからさ。」
「そうだよ、シュウと過ごせるって言ってさ。」
「俺たちだって、イギリスにいるときは自分の女といるんだし、シュウも遠慮しなくたっていいよ。」
「…みんな…」
「俺らとしては、ジェイがシュウといて、いい曲をたくさん書いてくれたほうがいいしな。」
「ほら、シュウ。みんなああ言ってるんだ。」
「ジェイ…」
「もう取材も全部受け終わったし、俺たち明日の夕方には日本を発つけどさ、ジェイは後もう数日こっちにいるみたいだから、2人でゆっくり楽しみなよ。」
「え…ジェイ…？」
「何、シュウ？聞いてなかったの？」
「俺言ってないもん。シュウをビックリさせようと思って♪」

「え…やだ…ジェイ…」

秋の目から、また涙が零れ落ちる。

「ジェイ、明日は帰っちゃうと思って…すごく寂しかったんだけど…まだ一緒にいられるんだ…」

「そうだよ、シュウ。」

ジェイがにっこりと秋に笑いかける。

「もう、ジェイったら…」

「じゃぁ、俺ら行くから。」

「えっ、ジェイ？」

「後はよろしく。」

ジェイはそういうと、秋を連れて、会場を後にした。

夏休み６

朝、秋の部屋の電話がなった。
まだベットの中にいた秋は電話の音で目を覚ました。

「もし…もし…？」
「秋先生…すみません、まだお休み中のところ…」
「湊…先生？」
「そうです。」

朝とはいっても、もう日は高く上っていて１０時をまわっている。

「あ…すみません、湊先生。」
「こちらこそ、お休み中のところをすみません。」

湊は少し申し訳なさそうに謝っている。

「お休み中で申し訳ないんですが、今朝学校から緊急の連絡があったんです。」
「緊急…ですか？」
「はい。秋先生の担当している学年のことでは無いので、休暇中の先生のところへ直接連絡は行かなかったと思うんですが、先生の場合は一部ですけど全学年の生徒たちを見ていらっしゃるので資料だけでもお渡しした方がいいと思いました。今日中に一応目を通していただきたいので、お休み中と分かっていたんですが連絡をさせていただきました。」
「あ…そうだったんですか…わかりました。」
「シュウ？」

「あ…」
「…秋先生…今の…ご主人ですか？」
「えっ…あ…あの…は…い…」
「それは申し訳なかったです。秋先生、今日はご自宅の方にいらっしゃるんですよね。」
「あの…」
「ここから２０分くらいでいけますから、資料だけそちらに届けます。」
「え…！」
「…秋先生…何かまずいことでも…？」
「いぇ…あ…」

ジェイが起きてきて、秋のことをしっかりと抱きしめなおした。

「シュウ、誰？」
「あ、学校の先生なの。」
「…この間の男？」
「…ううん。違う先生…」
「そいつも男だな…」
「ジェイ…」
「なんだって、そいつ？」
「あ、あの、学校から緊急の連絡があって…資料だけ届けてくれるって…」
「そいつ、これからここに来るの？」
「…そうみたい…」
「ちょうどいいや。俺、会ってみる。」
「えっ、ジェイ！それはだめだよ。」
「どうして？」
「だって…」

秋は困った顔をしている。

「秋先生？」

「あ、あの…」

「資料をお渡しするだけです。お2人のお邪魔はしませんよ。」

「え…あの…でも…」

「とにかく、これからすぐお持ちしますから。」

そう言って、電話は切れてしまった。

「ど、どうしよう…」

「シュウ、心配しなくても大丈夫だよ。」

「ジェイ…」

ジェイは不安そうにしている秋をもう一度抱きしめるとキスをした。

「シュウ、そいつ、もうすぐ来るんだろ。そのままじゃ、まずいよ。」

「あっ…」

秋もジェイもまだ裸のままだ。

昨日、U－STREAMのメンバーと別れた後、秋のアパートに来て、それからずっと2人で愛し合っていたのだ。

今朝、空がうっすらと明るくなるまでずっとジェイは秋を抱き続けていた。

「早く着替えなきゃ！」

秋はあわててシャワーを浴び、急いで着替えた。

ジェイもさっぱりとした後に洋服を着た。

「シュウ…それ…まっ、いっか。」
「え…？」
秋は嫌な予感がしてあわてて鏡のところに行った。
「キャァ～！もう、またジェイったら！！！」
ジェイは肩をすくめると、秋を抱き寄せながら耳元で囁いた。
「それは、虫除けだよ、シュウ。」

夏休み7

湊は秋のアパートの前に来た。
今この中に、秋の夫がいる。
以前から会ってみたいと思っていた。
湊は自分の事は外見や能力を考えてもそれなりのものだと思っている。
だが、秋は自分に全く心を動かされることが無いのだ。
それに自分の夫の方がいいと言った。

「いったいどんな奴なんだ…」

湊は秋のアパートのチャイムを鳴らした。

「あっ、先生が…」
「来たの？」
「あぁ、ジェイ！お願いだから、出てこないで。資料をもらうだけですぐ帰るって言ってたから、お願い。」

秋にお願いをされて、ジェイは肩をすくめた。
秋はそれをジェイが了解した合図だと思った。

「はい、今開けます。」

玄関を開けると、湊がにっこりと微笑みながら秋に資料を渡した。

「秋…先生…その…」

湊は、秋の首に巻かれているスカーフを見て、口篭ってしまった。夕べから今朝まで、またジェイにしっかりと跡をつけられてしまって、隠しようがないとわかっていてもやっぱり何かせずにいられなかったのだ。それにスカーフを巻いても、まだ少しその隙間から見えてしまっている。

「…ご主人…ですね…」

「え…あっ、あの、すみません…」

秋が真っ赤になっている。

「ご主人、今日いらっしゃるんですよね。」

「え…そう…ですけど…」

「会わせていただけませんか？」

「えっ！だっ、だめです！！！」

「…秋先生…」

「あっ、あのっ…か、彼…疲れているので…あの…だめですっ！！！」

「秋先生…何かあるんですか？秋先生のご主人って…」

「えっ…」

「前に、田上先生に断られたときに、ちょっと引っかかったんですよね…秋先生の様子が…」

「え…あの…だめです…本当にだめ！」

「秋先生…何か、知られてはいけない事情でもあるんですか？」

「あの、あの…」

「そんなにキスマークをつけるくらい、秋先生のご主人は秋先生のことが大事なんでしょ。」

「え…」

「その大事な秋先生と離れて暮らしてて…それは仕事以外に何か理由があるんじゃないんですか？」

「え……」

秋は真っ青になってしまった。

湊は他の先生達も一目置く、頭が切れる教師だ。

生徒たちのこともよくみていて、少しでもおかしなところがあると、何かがある前に適正に対応をしている。観察眼も鋭いのだと思っていた。

だが、その鋭い観察眼が、自分に向けられているとは思っていなかった。

湊には、きちんと付き合えないと断りを入れた時点で、自分はもうそういう対象からはずれていると思っていた。

だから、必要以上に観察されることなどないと思っていたのだ。

田上とのちょっとしたやり取りの中で、何かを嗅ぎ当ててしまうなんて…

秋は玄関で固まってしまった。

「シュウ！Ｗｈａｔ' ｓ　ｕｐ？」

「あっ…ＮＯ！…」

ジェイが秋と湊のやり取りを聞いて、何かただごとでは無い様子を感じたのか、部屋の奥から出てきた。

ジェイをみて、今度は湊がその場で固まってしまった。

「え…ジェ…イ？まさか…」

「何？シュウ、彼は何て？」

「え…」

秋はジェイに、今、湊がなんといったか聞かれた。

それに答えたのは、秋ではなく湊本人だった。

「ジェイ？Ｕ－ＳＴＲＥＡＭの…？」

「…俺のこと知ってるんだ。」

「え…まさか…本物…」

「本物で悪いか？」

「…どうして…」

「どうして？シュウは俺のワイフだからだろ。」

「…秋…先生の…ジェイが夫？」

「そういうことだ。」

湊はジェイをじっと見た。

本物だ。間違いない。

一昨日、日本公演で歌っていた、あのジェイだ。

「本当に、秋の…夫？」

「あぁ。」

３人ともその場で動かなくなってしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1164z/

SOUND OF HEART

2011年12月7日23時00分発行